

かつ た しょう きん
勝田 焦琴 (1879～1963 年)

勝田焦琴（本名：良雄）は、棚倉町に生まれ、主に文展、帝展など戦前の官展を舞台に活躍した日本画家です。

画家としての歩みは、10代のころに野出蕉雨（会津の画家）に手ほどきを受け、20歳にして上京し橋本雅邦に師事し、その画技に磨きをかけました。

東京美術学校日本画選科に入学し、従来の画派的な学習に加え、西洋画の写実表現を加味した新しい日本画の創造に向かって努力を続けます。入学前後から、二葉会展や美術研精会展、日本絵画協会共進会などで頭角を顕し、卒業後インドにわたり日本画を教えました。

帰国後は、文展や帝展に連続して入選を重ね、帝展審査員をつとめるなど、東京画壇の重鎮として幅広い活躍をみせました。

官展の中堅作家が集結した如水会の創立に加わり、また福島県出身の日本画家を集結した福陽美術会を発足させるなど、特に県内画壇の育成に力を注ぎました。

東洋画の模写や西洋流の写実と日本画の伝統を調和、発展させ、豊かな表現を獲得するために努力を重ね、近代的な感覚を盛り込んだ気品あふれる作品を数多く生み出しました。花鳥画をはじめ、山水、道釈画など、その作品はどれも官展の重鎮と呼ぶにふさわしい高い水準にあります。

勝田焦琴は、日本画壇や福島県の日本画界をリードした、棚倉町出身の日本画家です。